

平成 21 年 6 月 8 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19530850

研究課題名 (和文) 子ども集団における規範意識形成の理論的・実証的研究

研究課題名 (英文) Theoretical and Demonstrative Research of Forming the Norm Consciousness in a Children-Group

研究代表者

岩田 遵子 (IWATA JUNKO)

東京都市大学・人間科学部・教授

研究者番号：80269521

研究成果の概要 (和文) : 学級崩壊等に見られるような、子どもたちの規範意識が低下している状態に対して、従来は、教師が規範を厳しく指導するなど、子どもたちの外側から規範を強制的に刻印する方法が主張されてきた。それに対して本研究は、子ども集団が内側から規範を形成していく原理とその可能性およびそのための保育者や教師に求められる援助のあり方を、幼稚園と小学校におけるフィールド調査によるエスノグラフィーによって明らかにした。

研究成果の概要 (英文) : It is said that in these days children have little awareness of norms, as the classroom-collapse, and the best means for their acquiring norms is to carve them by discipline. As opposed to it, this study considers norms as forming inside children's communication, not as being implanted from their outside, and shows the organization of children's forming their norm by themselves through the fieldwork in some kindergartens and elementary schools.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：教育方法学、保育学

科研費の分科・細目：教科教育

キーワード：子ども集団、いじめ、近代学校教育制度、ノリの共有、規範形成、遊び

1. 研究開始当初の背景

学校における子どもの正しい行動のあり方、正しい判断の仕方 (互いに協力しあうことが大切である、いじめなどの差別を克服し、排除される子どもがクラスの中で解消されることが望ましい等) を社会規範と呼ぶとすれば、これらは従来、教師によって、あるい

は、学校のシステムによって外側から子どもに教授したり、行動統制することを通して、子どもに刻印されていくという考え方が一般的であった。しかし近年、こういう統制や教授が子どもに伝わっていない、身に付けられていないという事実が教育現場でさまざまなかたち (学校崩壊や学級崩壊) であらわ

れている。

このような現状に対して、大人たちがどのように対応したらよいかを考察する研究は、これまで具体的事例を扱う事例研究かアンケート調査だったが、前者の場合は、規範形成のプロセスを解明する理論の欠如から、規範形成に対する処方箋を外から与えるのに際する経験主義的知見しか提供できず、また後者の場合は、規範形成の主体である子どもの「心」の問題をアンケートによって解明しようとしていたが、それは規範形成のための実践に対しては、参考以上のものは提供できていなかった。

以上のような従来の規範形成に関する研究に対して、規範が集団の内部から発生するものとして、その発生原理を論じた大澤真幸の身体論的社会システム論（『身体の比較社会学Ⅰ、Ⅱ』勁草書房）は、注目すべきだと考えられた。身体は相互に同調する機制を持ち、複数の身体が同調しているとき、それらの複数の身体の同一の志向作用（身体的同調）が物象化し、それが個々の身体の行動に規範的な効力を及ぼす超越論的な座へと転換し、それが規範となる、というのである。

この論に基づくなら、子ども集団における規範の発生原理は、子どもたちの身体の同調（ノリの共有）に求められることになる。研究代表者らは既に、幼稚園における子どもの集団の遊びや小学校の学級生活において、このように解釈される事実を確認し、それが上述の大澤の論によって解釈可能であることを論証しつつあったが、それらは幼稚園や小学校で偶然に出会った事例であり、規範意識形成をテーマとして継続的なフィールド調査を行ったものではないので、規範意識形成をテーマとした継続的フィールド調査によって、子ども集団において上述のような原理によって規範意識が形成されることの実証性を高める必要がある。

2. 研究の目的

集団における子ども達の秩序感覚や規範意識が、外部から教えられることによって獲得されるのではなく、子ども自身の内側から生成するものであるという理論仮説に基づいて、子ども集団における規範の生成の過程を明らかにするとともに、そこにおける教師の役割を明らかにすることを目的とする。

具体的には、(1)学校における規範の形成を、子ども自身の内側からどのようにしたら形成できるかということについての理論的な仮説を構築し、(2)教育現場における具体的な実践例の分析を通して仮説の可能性を検証し、それによって(3)教師の子ども集団への対応の仕方についての示唆を得ること、である。

3. 研究の方法

小学校と幼稚園における継続的フィールドワークによって子ども集団における規範意識形成過程のエスノグラフィーを作成し、次の視点から分析を行う。フィールドとする小学校は、年度当初はいじめのような「負の規範」が存在しているが、学級生活における教師の自覚的な働きかけによって「負の規範」が消滅し、「正の規範」が成立し、子どもたちのものとなっていく学級（姫路市立荒川小学校の本庄富美子教諭が担任する学級）であり、フィールドとする幼稚園は、集団による自発的な遊びが一定の時間持続している幼稚園（A市公立幼稚園、およびB市公立幼稚園）である。

幼稚園の遊びの場合、身体的同調（ノリの共有）には原初的な規範が伏在しているが、そうだとすれば、記録された遊びの身体的同調に伏在するのは、どのような規範か。また、ノリの維持および回復によって遊びの構造に変化があるか。

小学校の場合、「負の規範」を内在するクラスにおいて、教師は「正の規範」をどのように提示しているか（例：成績による序列化の論理によって「問題児」が生まれるとすれば、教師はそれをどのように扱っているか）。また、一般に近代学校システムにおいては、教師と子ども、子ども同士に身体的同調は生成しにくい。教師と子ども、子ども同士の同調が生成する場合、それはどのようにして生起するか。「正の規範」提示するような教師の働きかけを子どもたちはどう受けとめているか。その過程においてクラスの子どもの人間関係はどのように変化するか

（例：「問題児」に対する他の子どものかかわり方は、どのように変化するか）。また、その変化の過程で子ども達はどのようにして「正の規範」を自らのものとして引き受けていくか。

4. 研究成果

(1)小学校（本庄教諭のクラス）の場合

① 担任教諭の学級経営の「方略」

19～21年度の3学級において、学級集団において、年度当初には問題児として学級メンバーから排除されている子どもが存在しており、「負の規範」が支配的であったが、担任教諭の学級経営のもとでの学級生活の過程で、次第に問題児の排斥行動が減少して「正の規範」が成立し、同時に問題児の問題行動も減少していく過程が観察された。

例えば、19年度の5年生のクラスでは、総合発達障害のH子が、4月にはクラスの皆から排斥され（「汚い」「うざい」と言われる）、そのためH子はクラスの皆を恐れ、教室に入

ってすることができずにいた。H子は自分の行動を制御できず、また他者の持ち物を奪い取ったり、当番活動を行うことができず、また授業中には座っていることができず歩き回ったり、学校を出て行ってしまふなどの行動障害（4年生のとき）も見られていた。

しかし、クラスの子どもたちのH子への態度が少しずつ変容し、6月初旬には、H子が教室に入り、自分の席に着席することができるようになった。以降、皆と一緒に授業を受けることもできるようになっていった。同時に、クラスの子どもたちのH子に対する態度は、H子を暖かく受け入れ、H子が当番活動など一緒に行くことを喜ぶものになっていき、休みがちなH子が登校することを歓迎し（登校すると拍手が起こることもあった）、待ち望むようになっていった。

このようなH子の行動とクラスの子どもたちの態度の変化は、フィールドデータによる分析から担任の学級経営の次のような「戦略」によるものと解釈できる。

・近代学校教育システムの序列化の論理の拒否

ア) 個別学習形態を取ることが多い

イ) 学習到達度の低い者に対しての否定的言明を排除する

・学習到達度とは別の価値規範の提示

ウ) 人としての価値は、学習到達度によって評価されるものではなく、学業の優劣とは別の価値的規範（学業面での優劣は人間としての価値とは同列ではなく、人間として価値のあることは、弱者の身になれることである）を身体的行為として提示する

・「過程身体」の水準の活性化

エ) 子ども同士の相互コミュニケーションを可能にする机の配置

オ) 他者の身になることを言語的に働きかけ、子ども相互の間にノリの共有を復権（「過程身体」の水準を活性化）させる

カ) 教師が子どもの身構えをなぞる言動をすることによって、教師と子どもの間にノリの共有を復権（「過程身体」の水準を活性化）させる。

キ) 子どもを評価する際に序列化の論理を超えた意味を持つ比喩言語（「根性ババ色」「天井を突き抜ける凄さ」など）を用いる。

②授業経営の「方略」

小学校における授業は、教師と子ども、子ども同士の間の身体的同調は、制度的には排除されているが、本庄教諭のクラスでは身体的な同調が成立し、それゆえに正しい規範が形成されていると思われた。このようなことが近代学校内において可能なのは、次のような「方略」によると思われる。

ア) 授業中の発言が、演技的な定型化された発話パターンとなっている。

イ) 教師の発問に対する、子どもの応答の発言が、教師あるいは第三者に向けられているのではなく、クラスの子どもたちに対して向けられていることを意識させるような発話パターンがある（それによって子ども同士の応答性が意識化される）

ウ) 教師が子どもの発言を評価するというよりは、発言した子どもの身構えを共有していることが言語的に明示される

エ) 序列化が現前することを極力避けるような授業方法

オ) 以上の積み重ねにより、授業過程が教師主導ではなく、子どもたちによって主導されるような展開が可能になっている。

カ) 国語や総合の授業において劇活動が重視されている。特に3学期には、序列化とは別の象徴体系による物語の劇を行う。

(2)幼稚園の場合

① 規範形成のためのノリの共有維持のための「戦略」

遊び持続幼稚園の遊びにおいて、子どもたちの中か秩序を維持しようとする動きが出てくるのは、遊びの身体的な同調の共有度が高まったときである（リレーごっこの同調性が高まったとき、秩序から逸脱する子どもを自発的にコントロールする動きが生じる事例を確認）。

そうだとすれば、遊びにおける同調性が維持されることが、子どもたちの自発的な規範意識の形成を促すと考えられる。

遊びの同調性を維持し、高めるための保育者の援助のあり方は、次のように整理される。

（なお、この援助のあり方については、研究連携者小川博久が保育援助論として既に展開しているが、本研究では、その実証性を得ることができた）。

ア) 子どもの遊びのコーナー（製作コーナー、ままごとコーナー、ブロック、積木コーナーなど）が設置されること。

イ) その場合、遊びの各コーナーが、保育者の俯瞰する「まなざし」の中に位置するような位置関係となる必要がある。「まなざし」には2種類があり、ひとつは、子どもを見守るものであり、そのことを子どもが認知する（自分が保育者に見守られていると思える）ことによって、子どもは安心して自分の遊びに集中することができる。いまひとつは観察のまなざしであり、これによって保育者は子どもの遊び状況（ノリの共有のされ方）を診断し、自分の援助の方法を構想することができるのである。

そして、このような「まなざし」を可能にするためには、製作コーナーに保育者が壁を背にして座り、製作コーナーを拠点とすることが必要となる。

ウ) 保育者が身体的パフォーマンスによって

遊びのノリを創出することによって、子どもたちのノリ生成を喚起すること。

以上の3つの「戦略」によって、子ども集団の遊びが一定の時間持続し、子どもたちがノリの共有を維持し、遊びの秩序を維持している（そうでなければ遊びが一定の時間続かない）場面を、いくつか観察することができた。

また、その一方で、保育者が以上のような「戦略」を持たないために、子どもたちのノリの共有が維持されず、それゆえ遊びの秩序が維持されず、群れ集団が偶発的に形成されても、遊びが持続せずに、集団も消滅する事例も少なからず採集された。

② ノリの共有読み取りのための「戦略」

子どもたちがノリの共有を維持するための保育者の以上の「戦略」のうち、観察のまなざしを持つことは重要である。というのは、どのような援助をするかという構想、子どもの遊びのノリ生成の状況の読み取りをもとに行われるので、この読み取りが適確でなければ、適切な援助も構想されないからである。

しかし、保育実践当事者が遊びのノリを適確に読み取ることは容易ではない。保育者が夢中になって子どもと一緒に遊んでしまったら（ノリ生成当事者となる）、子どもたちの遊び状況を読み取るパースペクティブが展げず、遊び全体のノリの状態を読み取ることができない。遊びのノリの状態を読み取るためには、保育者が遊びを読み取る態勢を取る必要がある。

それは、保育者が遊びの中心参加者となるのではなく、周辺的に位置取ること、および遊び全体を俯瞰できる位置にいて、ノリを潜在化した状態であることが必要である

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計12件）

①小川博久 現代における子育て一少子化時代をどう乗り越えるか、財団法人福島県私立幼稚園振興会研究紀要、査読無、21号、2010、pp.26～49

②小川博久 遊び保育論(1)一幼稚園教育制度の枠組みを前提に一、聖徳大学文学部・音楽学部紀要、査読無、20号、2010、pp.17～23

③岩田遵子・小川博久 教育実践における「反省的思考」論の可能性の再検討(2)、聖徳大学児童学研究所『児童学研究』、査読無、12号、2010、pp.17～23

④岩田遵子・小川博久 教育実践における「反省的思考」論の可能性の再検討(1)、

聖徳大学児童学研究所『児童学研究』、査読無、11号、2009、pp.76～82

⑤岩田遵子 遊びの援助における「見る」と「関わる」ことの関係性一「見る」ことの「当事者的直観」からの峻別の必要性一、東横学園女子短期大学紀要、査読無、43号、2009、pp.63～83

⑥岩田遵子 学級全員が意欲的に取り組む合奏はいかにして可能か一ノリによるコミュニケーションを通して一、音楽教育実践ジャーナル、査読有、vol.6-2、2008、pp.59～70

⑦小川博久 現代における「遊び」保育とは何か(2)、キリスト教保育（日本キリスト教育連盟）、査読無、420号、2007、pp.6～12

⑧小川博久 現代における「遊び」保育とは何か(1)、キリスト教保育（日本キリスト教育連盟）査読無、419号、2007、pp.6～12

⑨小川博久 日本の伝承遊びの現代的意義、野外文化教育（野外文化教育学会）、査読無、9号、2007、pp.35～44

⑩小川博久 子どもの遊び場における「プレイヤー」の役割についての理論形成の必要性 生涯学習研究（聖徳大学生涯教育研究所紀要）、査読無、5巻、2007、pp.85～90

⑪岩田遵子 逸脱児が集団の音楽活動に参加するようになるための教師力とは何か一ノリを読み取り、ノリを喚起する教師力一音楽教育実践ジャーナル（日本音楽教育学会）、査読有、vol.5-2、2008、pp.12～18

⑫岩田遵子 「幼児理解」の観念性を問い直す一保育者は子どもの創り出すノリによる「子ども文化」とどう向き合うか一 関東教育学会紀要、査読有、34号、2007、pp.13～25

〔学会発表〕（計12件）

①岩田遵子・小川博久 教室の学級経営（教授活動を含む）を生活の演技論から考える一学級活動と劇指導の連続性から一、日本教育方法学会第45回大会、2009年9月27日、香川大学（香川）

②小川博久、請川滋太、高橋健介、岩田遵子 遊び保育の実践と評価をめぐって、日本子ども社会学会第16回大会、2009年7月5日、中国学園大学（岡山）

③小川博久、足利静子、戸田雅美、内藤知美、岩田遵子 遊びの援助とは何か、日本保育学会第62回大会、2009年5月17日、千葉大学（千葉）

④岩田遵子 第三者記録としての映像記録の意味、日本保育学会第62回大会、2009年5月16日、千葉大学（千葉）

⑤岩田遵子・小川博久 教授-学習活動の一方的コミュニケーションを克服する試み-

教授-学習活動と学級活動の連続性の視点-
から-、日本教育方法学会第44回大会2008年10月12日、愛知教育大学(愛知)

⑥岩田遵子・渡辺桜、吉田龍宏 子どもの遊びに対する援助とは何か、日本保育学会第61回大会、2008年5月17日、名古屋市立大学(愛知)

⑦岩田遵子 遊びの援助における「見る」と「関わる」ことの関係性—第三者記録の必要性—、日本保育学会第61回大会、2008年5月17日、名古屋市立大学(愛知)

⑧岩田遵子 学力差を超えた人間関係づくり—「いじめ」機制を抑制する学級経営—、日本教育方法学会第43回大会、2007年9月29日、京都大学(京都)

⑨岩田遵子・小川博久 教育実践における「反省的思考」の可能性—D. ショーンの「反省的思考」論の批判的考察—、日本教育方法学会第43回大会、2007年9月29日、京都大学(京都)

⑩小川博久 ビデオから考える保育者の言葉がけ—保育者の専門性を具体的行為から読み取る—、日本保育学会第60回大会、2007年5月19日、十文字学園大学(埼玉)

⑪小川博久 幼児の生活の危機をめぐって—保育の立場でどう取り組むか—、日本保育学会第60回大会、2007年5月19日、十文字学園大学(埼玉)

⑫岩田遵子遊びの援助における「見る」と「関わる」ことの関係性—「見る」こと「当事者的直観」からの峻別の必要性—、日本保育学会第60回大会、2007年5月19日、十文字学園大学(埼玉)

[図書](計1件)

岩田遵子・小川博久 子どもの「居場所」を求めて—子ども集団の連帯性と規範形成—、ななみ書房、2009、全305頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田遵子 (IWATA JUNKO)
東京都市大学・人間科学部・教授
研究者番号：80269521

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

小川博久 (OGAWA HIROHISA)
聖徳大学・文学部・教授
研究者番号：60002698